



集いし幻獣達

そしてしばらく自転車を扱ぎ、夏菊とストレンジャーは家へと帰ってきた。
帰るとすでに日は沈んでおり、辺りが少々暗かった。
夏菊は移動の際に使った自転車をいつもの場所に止め、家へと向かった。

「ただいまー」

「お帰りなさい夏菊。随分長い散策だったわね。」

夏菊は家へと入ると母親がキッチンから出迎えた。

「ごめんなさい。」

「いいのよ。少しでも記憶が戻ってくれば、私は嬉しいわ。」

母親は夏菊が帰ってくるのが遅れたことに関して特に何も言わず、怒りはしなかった。

「ありがとう。母さん。」

「さ、お風呂に入ってお夕飯を食べなさい。」

「はい。」

夏菊は靴を脱ぎ、風呂場へ向かって行った。
ストレンジャーも同様に家へ上がり、夏菊の後について行った。

その後夏菊はお風呂と食事を済ませ、自室へ戻って行った。

「ふう、今日は疲れたー」

夏菊はベッドに腰掛け言った。
まだ病院を出たばかりであることもあり、学校と長距離のお出かけは少々疲れたようだ。

「学校以外に少し遠出をしたからな、ゆっくり休みなよ。」

ストレンジャーも同様にベッドに腰掛けつつ夏菊に言った。

「でも、そこまでゆっくりもしてもらえないよ。　まだストレンジャー君以外のオリキャラの記憶が戻ってないから。」

夏菊は部屋に置いておいたファイルを取り、ページをめくりつつ言った。

中にはストレンジャーと、ストレンジャー以外のオリキャラが書かれたルーズリーフが閉じられていた。

「その件もあったな。　だがとりあえず、そう言うことは明日になってからだ。」

「そうだね。」

夏菊は素直にストレンジャーの意見を聞き、照明を消し、ベットに入った。

「ストレンジャー君も一緒に寝ない？　昨日は壁にもたれて寝てたけど、いつもベットでしょ？」

夏菊は昨日の事といつものストレンジャーの行動を思い出し、ストレンジャーに言った。

「俺のことを完全に思い出したみたいだな。　では、そうさせてもらおうか。」

ストレンジャーは夏菊の意見を聞き入れ、ベットの下に靴を置き、夏菊の隣に潜り込んだ。

「お休み。　ストレンジャー君。」

夏菊はそう言うと、目を閉じ寝てしまった。

『お休み、マスター』

ストレンジャーも同様に目を閉じ寝てしまった。

そして、次の日の朝日が、街に顔を出した。

昨日と同様に、街に日差しが照らされ、朝がやってきた。

夏菊とストレンジャーの寝る室内に朝日が差し込み、2人は眩しそうにしつつ、ゆっくり起き上がった。

「ううーん。 よく寝た〜」

夏菊はあくびをしつつそう言うと、ベットを降りた。

ストレンジャーもベットから起き上がり、体を伸ばし、ベットの下に置いておいた靴を履いた。

「おはよう、ストレンジャー君。」

「おはようマスター」

夏菊はストレンジャーとの生活にもなれ、普段の生活の一部となった。

今日から夏休みのため、夏菊は制服では無く私服に着替えた。

だが起きる時間帯は学校へ行くときと変わらず、6時起き。

そのため夏菊は食事を終わると、学校から出た夏季課題に手を出し、少しずつ片付けていった。ストレンジャーは夏菊が課題をやっている間は暇なため、部屋に置いてあった適当な本を取り、座って読んでいた。

「うーん。 ちょっと疲れちゃった。」

夏菊は机に向かった席から立ち上がり、体を伸ばした。

約2時間ほど机に向かっていたため少々疲れたご様子。

「お疲れ様マスター。」

ストレンジャーは体を伸ばさず夏菊にそう言った。

「えっと、もう9時か。」

夏菊は机の上に置いてあった時計を見て、時刻を確認した。

それから机の上に広がっていた課題をかたし、まとめて机の隅に置いた。

「じゃ、そろそろ活動しよっか。」

夏菊がそう言うと、ストレンジャーは首を縦に振り同意を示した。

意見がまとまり、夏菊は帽子を被り、携帯とクローバーを持ち、ストレンジャーと共に下へ降りて行った。

「ちょっと出かけて来まーす。」

夏菊はキッチンに向かってそういい、靴を履いた。

「？ あら夏菊。 お散歩？」

キッチンから母親が顔を出し、夏菊に問いかけた。

「うん。 お昼過ぎまでには戻るから。」

「わかったわ。」

夏菊は母親にそう告げると、ストレンジャーと共に外へ飛び出した。

外は夏休みということもあり、日差しが強く暑かった。

夏菊は自転車置き場に止めておいた自転車に乗った。

「えっと、どこに行こうか？」

特に目的地を決めてなかったため、夏菊はストレンジャーに問いかけた。

「マスターが行くところなら体外迷人がいると思うから、適当に散策しててもいいんじゃないかな。 マスターも俺も見えるんだし。」

「わかった。 じゃあとりあえず、学校の方に行ってみようか。」

目的地が決まり、夏菊は自転車を扱ぎ学校近辺へ向かって行った。

ストレンジャーも夏菊の後に続くため、羽を広げて飛んで行った。

夏菊とストレンジャーは学校へ行く途中、道路や街路樹の陰など、迷人がいないかどうかチェックをしつつ進んでいった。

『うーんと、特にいないみたいだね。』

夏菊は自転車を扱ぎながら辺りを見渡し、迷人がいないかどうか確認しつつ進んでいた。

「普段どこにいるのか情報が無いからな、闇雲に探すしかないな。」

ストレンジャーは夏菊からは見えない高い位置を搜索しつつそう言った。

「あ。あれ違うかな？」

夏菊は不意に何かを見つけ、指差した。

夏菊がそう言うと、ストレンジャーが高度を低くし、夏菊の元に下りて指差した方向を見た。そこには黒い霧の塊、迷人がいた。

「間違いないな。迷人だ。」

「早速話せるか確認しよう。」

夏菊は自転車を降り、迷人の元へ進んでいった。

すると迷人はこちらを確認し、住宅街の裏を逃げていった。

「あ、行っちゃった。」

「追いかけるか？」

「もちろん。」

夏菊はそう言うと、再び自転車に乗り、迷人の逃げていった方向へ走っていった。

ストレンジャーも同様に後を追いかけた。

しばらく迷人を追いかけると、迷人はどこかの空き地の中心にいた。

「ふう、ようやく追いついた。」

夏菊は自転車を降り、迷人の元へゆっくり近づいた。

ストレンジャーも夏菊に続いて進んで行く。

『かかったな！！』

迷人は夏菊達の行動を見つつ、そう言った。

すると空き地に置いてあった土管やタイヤの中から大量の迷人が出現し、夏菊とストレンジャーに襲い掛かった。

「何！？」

「チッ 罨か！！」

ストレンジャーは夏菊の前に立ち、剣を片手に迷人と戦った。

夏菊はストレンジャーの後ろへ立ち、ストレンジャーの行動を見守るしかなかった。

次々と襲い掛かってくる敵に対し、ストレンジャーは夏菊を守るため、必死になって戦った。

だが敵は攻撃されても次から次へと出てくるため、霧が無い。

「くそっ、キリが無い！」

ストレンジャーは相手を攻撃するものの、敵が減る様子が無いため、段々と疲れてきた。

夏菊はそんなストレンジャーを見た。

『ストレンジャー君1人じゃ手に負えないんだ。 皆、力を貸して！！』

夏菊は自分の前で戦うストレンジャーの疲労を察し、手を胸の前で組み願った。

キラッ！！

すると持っていたクローバーがあの時同様に強く輝いた。

そしてクローバーの光の中から人影が飛び出し、ストレンジャーの前に立ち相手の攻撃をすべて

、それぞれが持っていた武器で防いだ。

「ふう、とりあえず何とかなっただわ。」

「ストレンジャーだけに、戦わせるわけにはいかねえからな。」

「随分と好き勝手やってくれたわね。」

「でもこれ以上好きにはさせません。」

「俺達に敵うはずが無いからな！！」

「皆！！」

ストレンジャーの前に立っていたのは、夏菊が作り出した、ストレンジャー以外の5人のオリジナルキャラクター達だった。

それぞれが獣と人間を混ぜたようなキャラクターだった。

「皆さん！！ 力を貸してください！！」

夏菊は出てきたほかのオリキャラ達にお願いした。

「もちろんよ！」

「依頼されなくても、やってやるさ！！」

出てきた5人のうち2人がそう言うと、5人がそれぞれ、目の前にいる敵を倒していった。

「ストレンジャー君。大丈夫ですか？」

夏菊は自分の前から敵がいなくなり、その場でひざを付いたストレンジャーに言った。

「大丈夫だ。 マスターのおかげだぜ。」

ストレンジャーは少々疲れてはいたものの、夏菊にお礼を言った。

狛犬と創造主

夏菊が新たに召還した5人のオリキャラの活躍により、襲い掛かってきた迷人はすべて消えた。

「これで終了ね。」

「歯応え無い奴らだな。」

5人は敵を全滅させると、マスターである夏菊の元へ帰ってきた。

「ありがとうございます。 皆さん。」

「いいのよ。 気にしないで。」

「僕達を召還して下さいました。 それだけで十分ですから。」

目の前に立つ5人のうち、2人はそう言った。

夏菊の前に新たに召還されたのは、鳥、虎、亀、犬、豹だった。

赤いドレスを着ている赤い鳥は、アルドール

青のラインが入ったTシャツと、黄色いズボンを履いている白い虎は、ピスフリー

緑色のドレスを着ている緑色の亀は、ジョイ

白い服と、青い袴を履いた黄色い犬は、ビリーブ。

そして、緑色のマントを纏った橙色の豹は、コレージ。

それぞれが別々の服を身に纏ってその場に立っていた。

「皆のおかげで助かったぜ。 ありがとう。」

体力が回復したストレンジャーは立ち上がり、5人にお礼を言った。

「いいのよ。 スtrenジャーもマスターのためにがんばってたんだもの。」

「お疲れ様です。 スtrenジャーさん。」

アルドールとビリーブはストレンジャーにそう言った。

フラッ

『あれっ』

6人が会話をしていると、夏菊の視界が徐々にぼやけ始めた。

「？ マスター！」

ストレンジャーは夏菊の異常を察し、夏菊を支えた。

「大丈夫か？」

「う、うん。　なんか視界がぼやけて・・・」

夏菊は少々顔色を悪くしつつ、ストレンジャーに言った。

「きっとオリキャラを召還しすぎて疲れたんだ。」

コレージは夏菊の顔色と体調を見つつ言った。

「そうになると、私達も長時間マスターと一緒にはいられないわね。」

「マスター、俺達を戻してください。」

ピスフリーはそういい、夏菊に頼んだ。

「わかりました。　皆さん、ありがとう。」

夏菊は持っていたクローバーを差し出し、ストレンジャー以外の5人を戻した。

「また、必要な時に僕達を呼んでください。」

ビリーブは去り際にそういい、5人はクローバーの中に戻って行った。

残ったストレンジャーは夏菊を背負い、近くの木陰に連れて行き、少し休ませた。

「大丈夫か、マスター」

「うん。大丈夫だよ。」

夏菊は体調が良くなり、ストレンジャーに言った。

「オリキャラも召還しすぎると駄目なんだね。ストレンジャー君と一緒に時は大丈夫だったんだけど・・・」

「コレも容量上何か問題があるんだと思う。無理はしないでくれ。」

ストレンジャーは夏菊の身を案じ、そう言った。

「でも皆を外にいさせてあげられないのは可愛そう・・・」

夏菊は持っていたクローバーを出し、クローバーを見つつ言った。

クローバーの中には夏菊が作り出したオリキャラと、迷人が入っている。

「だったら、俺を戻して、変わりに誰かを召還してくれ。それだったら大丈夫のはずだから。」

不意にストレンジャーは思いつき、夏菊に提案した。

「ストレンジャー君はいいの？」

提案され、夏菊は少々不安になりつつ問いかけた。

「目の前にマスターがいなくても、そばにいることはわかっているから平気さ。必要な時に呼んでくれ。」

「わかった。ありがとうストレンジャー君。」

夏菊がそう言うと、ストレンジャーはクローバーに手を当て、姿を消した。

「・・・召還！」

夏菊はクローバーを手の中に入れたまま胸の前で組み、召還した。

「・・・ よろしくお願ひします、マスター」

召還されたのはビリーブだった。

ビリーブは膝を曲げ、座っている夏菊の目線に合わせて言った。

「少しの間だと思ひますが、ストレンジャー君の代わりに、自分をサポートしてください。」

「わかりました。」

ビリーブは夏菊からの申し出を受け入れ、そう言った。

「では、1回家に帰りましょうか。」

夏菊は立ち上がり、ビリーブと共に家へ帰って行った。

「ビリーブさん。」

夏菊は自転車を扱ぎつつ、自転車の後ろに乗っているビリーブに問ひかけた。

ビリーブには羽が無いため、自転車の後ろに立ち、二人乗りのように乗っていた。

「はい。 何でしょうか？」

「ビリーブさんは召還される前、迷人だったんですか？」

「先ほどの皆さんですね。 いいえ、自分は完全に迷人にはなりませんでした。」

ビリーブは召還される前までの事を思い出し、そう言った。

「・・・ストレンジャー君と一緒にですね。」

「多分、僕以外にも皆、コレを持っていたからだと思います。」

ビリーブは右手に破魔矢を召還し、付けていたクローバーを夏菊に見せた。

クローバーはストレンジャー君が持っていたものと同じで、白いクローバーだった。

「マスターは僕達6人にこのクローバーを託しました。 そのおかげで僕達の記憶が無くなり、存在価値が無くなっても迷人にはならなかったんだと思います。」

「それが、創造主が本当に認めた証だから。」

「その通りです。」

ビリーブは破魔矢をしまった。

「オリキャラに存在価値の証を託したから、皆迷人にならなかった。 そんなにすごいものだったんですね。」

「僕もこのクローバーにそんな力があるとは思いませんでした。」

ビリーブはクローバーの威力を知り、言った。

「迷人の皆さんは、そのクローバーを欲しがっているんです。 創造主が本当に認めた証の塊だから。」

「でも、コレ自体を渡しても意味はありませんね。 マスターは迷人の皆さんを助けたいのですか？」

ビリーブはふと思い、夏菊に問いかけた。

「ええ、元はといえば創造主である自分達が見捨てた事、忘れてしまった事が原因ですから。 救えるだけ救いたいんです。」

「では、僕では弱いとは思いますが、マスターのお力になります。」

「ありがとう。 ビリーブさん。」

夏菊は自分の後ろに立つビリーブにそう言った。

そして、2人は家へと向かって走って行った。

夏菊とビリーブは家に到着し、自転車を片付け家に入った。

「ただいまー」

「お帰りなさい夏菊。 お昼ご飯出来てるわよ。」

夏菊とビリーブが家に入ると、母親がキッチンから顔を出し、出迎えた。

「はい。」

夏菊は靴を脱ぎ、手を洗いに行った。
ビリーブもその後を付いて行った。

惑う迷人に襲う迷人

それから夏菊はお昼ご飯を済ませ、1回部屋に戻って行った。

「ふう、ちょっと休憩っと。」

「お疲れ様です。？」

ビリーブは夏菊にそう言うと、何かの気配を感じ、窓を見た。

夏菊も同様に気配を察し、窓を見た。

すると、そこには迷人がいた。

「また、迷人ですか。」

ビリーブは窓辺にいる迷人を睨みつつ、右手に破魔矢を召還した。

「まって、ビリーブさん。」

夏菊は行動しようとしたビリーブを止め、迷人の元へ

「貴方は、何か用があって来たのですか？」

『・・・』

迷人は窓辺にいたまま、夏菊を見た。

『存在・・・認めて・・・』

迷人は夏菊を見たまま、そう呟いた。

「認めて欲しい、なぜそれを？」

『貴方が・・・迷人の1人を・・・救ったから・・・』

「あの人ですね。」

夏菊はあの時病院であった迷人を思い出し言った。

「存在を認める事は構いません。 ですが、新しい存在を作るとき、ほかの迷人と一緒にになりますが、よろしいですか？」

『もちろん・・・です・・・ 迷人が・・・他の迷人と・・・いっしょになれば・・・強い存在に・・・なれるから・・・』
「わかりました。」

夏菊はそう言うと、クローバーを手に乗せ、迷人に差し出した。
迷人はクローバーに手を乗せると、消えてしまった。

「これで、また1人救われた・・・」
「マスターは、その迷人をどうするんですか？」

ビリーブは夏菊がとった行動を見つつ、問いかけた。

「たくさんの迷人を助けて、自分の新しい存在価値を取れる姿、オリジナルキャラクターにするんです。」
「たくさん集めるのは、なぜですか？」

ビリーブは再び夏菊に問いかけた。

「ストレンジャー君曰く、オリキャラを作るには容量と時期が足りないんです。 だから、たくさんの迷人を助け、形にするんです。」
「たくさんの人々を助け、形にするんですね。」

ビリーブはそう言うと、夏菊はうなずいた。
夏菊はクローバーをしまい、ビリーブの方を向いた。

「そうすれば、迷人に存在価値を与えられます。 もう迷わなくてもいいようになります。」
「大変でしょうけど、がんばってくださいね。 僕も、出来る限りのことはしますから。」
「ありがとう、ビリーブさん。」

夏菊はクローバーを持ったまま、ビリーブにそう言った。
それからしばらく、夏菊達は部屋で一時休憩を取り、夕方前に再び出かけて行った。

「マスター、今度は何処へ行くんだ？」

ビリーブをクローバーの中へ戻し、再び召還されたストレンジャーは夏菊に問いかけた。

「午前中は学校周辺だったから、今度は商店街の方を見ようと思うんだ。」

夏菊は午前中散策した場所とは別のエリアでの散策を提案した。

ストレンジャーはその提案に同意し、2人は商店街に向かって行った。

夕方前の商店街は比較的外気温度が安定しており、涼しい陽気だった。

夏菊は商店街の裏道や人通りの少ない場所を重点的に見つつ、辺りを搜索した。

ストレンジャーは夏菊からは見えない高い位置を見つつ、迷人を探した。

「夏菊ー」

2人が商店街を散策していると、前方から名前を呼ぶ声がした。

「あ、藍樹だ。 藍樹ー」

夏菊はこちらにやってくる藍樹に手を振った。

藍樹は自転車で夏菊の元へやってきた。

「よう。 こんな時間に何してるんだ？」

藍樹は普段夜に近い時間帯は外へ出ない夏菊の行動に疑問を抱き、問いかけた。

「うん。 ちょっと探し物をしてるんだ。 そこまでたいしたものじゃないんだけどね。」

「ひょっとして、後ろにいる奴と関係があるのか？」

藍樹はふと、夏菊の後ろにいたストレンジャーを見つつ言った。

「藍樹、見えるの？」

夏菊は少々以外に思い少々ビックリしつつ聞き返した。

「ああ。 なんだ、意外そうな顔だな。」

藍樹は夏菊の意外そうな顔を見つつ言ってきた。

「いや、学校にいた時は何も言わなかったから、ちょっとビックリして。」

「その時からいたのか。 始めまして、ストレンジャー」

「始めまして、藍樹。」

ストレンジャーは少々前に出て、藍樹と握手した。

「まあ探し物を探すのを手伝いたいが、俺には無理そうだな。」

藍樹は2人の様子を見て、結論を言った。

「ゴメンね。」

「いやいいんだ、気にすんな。 だが怪我だけはしないでくれよな。 あの時同様の気持ちになるのはもう御免だからな。」

藍樹は夏菊が目の前で事故にあった時の事を思い出しつつ言った。

「うん。 気をつけるよ。」

「じゃあな、夏菊、ストレンジャー」

藍樹は2人に手を振り、自宅へ向かって走って行った。

「この様子だと、恵さんもストレンジャー達が見えててもおかしくないね。」

夏菊は美津華と藍樹の行動を思い出し、そう言った。

「ああ、だが俺たちが見えてるって事は、少なからずこの事に巻き込まれてもおかしくは無いな。」

「早くこの事を終わらせて、平和な世界にしないとね。」

「そうだな。」

2人は少し会話をし結論に至ると、再び迷人探しを開始した。

すると、

『助けて・・・！！』

夏菊達が再び搜索を開始すると、不意に何処からか声がした。

「！ 今声が・・・」

「確かにしたな。」

ストレンジャーは辺りを見渡し、声の主を探した。

すると、住宅街の裏道に迷人が倒れていたのを発見した。

そのすぐ近くには別の迷人がいた。

「襲われてるみたいだな。」

「助けないと！」

夏菊は倒れていた迷人を助けるべく、裏道へと入って行った。

ストレンジャーも後に続いて入って行った。

罪人裁きの狼

2人が迷人の元へ付くと、地面に1人の迷人が倒れていた。

『ハッ、随分と弱いくせに俺様の指示を聞かない奴だ。 愚かな。』

「しっかり！」

『ん？』

夏菊は倒れていた迷人を起こし、安否を確かめた。

すると弱ってはいたものの、まだ生きていた。

夏菊は相手の存在を維持するため、とりあえずクローバーの中に倒れていた迷人を入れた。

ストレンジャーは倒れていた迷人を襲った別の迷人の前に立ち、相手を見た。

『随分と変わった奴らが出てきたな。 俺とやる気か？』

「随分と性格が曲がった迷人だな。 なぜ攻撃した？」

ストレンジャーはまだ手に剣を召還せず、相手に問いかけた。

『簡単だ。 俺様の指示を聞かなかった。 だから消すのさ。』

「存在を消すことは、罪深い行為とは気づいていないみたいだな。 お前の方が愚かだと思
うが？」

『言わせておけば！！』

相手はストレンジャーの言い放った言葉に怒りを抱き、襲い掛かってきた。

だがストレンジャーは片手に剣を召還し、相手の攻撃を防いだ。

「確かに強いが、マスターがそばにいる俺に勝てるとでも言うのか？」

『フッ、それだけだったら俺様も普通の存在だ。 だが、これならどうかな！！』

敵は体の形を変え、ストレンジャーのことを捕らえた。

「何！」

ストレンジャーは体の自由を奪われ、抵抗することが出来なかった。

「ストレンジャー君！！」

『くらえ！！』

相手はストレンジャーの目を見て、何か術をかけた。

「クハッ！！」

ストレンジャーは身動きがとれず、術にかかってしまった。

相手は術をかけ終わると、ストレンジャーを投げ捨てた。

「ストレンジャー君！！」

夏菊は投げ飛ばされたストレンジャーの下へ駆けつけ、体を起こした。

だがストレンジャー体の痛みとは違う打撃を受けたせいか、とても弱っていた。

「しっかり！！」

「マスター・・・俺はもう・・・」

「何をしたんですか！！」

夏菊は先ほどまでのストレンジャーとは違うストレンジャーを抱え、相手を睨んだ。

『存在そのものの名前。 その名前の意味を取ると、その存在はその力を失うのさ。』

「まさか！！」

『その通り、その存在の名前の力を俺は奪ったのさ。 もうそいつには戦うことは出来ない！！ 加えて。』

相手はそう言うと、手に黒い霧の塊を作り、夏菊の持っていたクローバー目掛けて攻撃した。

「わっ！！」

夏菊はとっさに避けようとしたが避けられず、クローバーはその霧の攻撃を浴びてしまった。

『その中にいる存在にも同じ技をかけた。 もうお前の頼れる奴はいないのさ。』

「そんな・・・」

夏菊は自分が支えていたストレンジャーを見た。

ストレンジャーは先ほどまでの強い意志は無く、とても弱弱しくなっていた。
支えているにもかかわらず、ストレンジャーの体は震えていた。
相手に怯えている様子だった。

「ストレンジャー君達にかけた術を解きなさい！！」

『ハッ、そんなことを俺様がするとでも思っているのか？』

「クッ・・・」

夏菊は相手を見つつ顔をしかめた。

『では、お前たちを消させてもらう！！』

相手はそう言うと、こちらに向かって襲い掛かってきた。
ストレンジャーは相手の行動に怯え、夏菊にしがみついて来た。
夏菊はそんなストレンジャーを見て、決心し、目を閉じた。

『お願い、自分に力を貸して！ 自由の意味を込めし存在！！』

夏菊は心の中でそう叫び、ストレンジャーを強く抱いた。
すると持っていたクローバーが強く輝き、辺りを包み込んだ。

『ぐわっ 眩しい！！』

敵は急な相手の行動に、その場に止まった。

しばらくし、クローバーからの強烈な光が徐々に収まり、辺りにさきほどの空気が戻った。

『な、なんだ！！』

敵は目を開け、夏菊達を見た。

だがそこには夏菊の姿は無く、代わりに別の存在と、その存在に支えられたストレンジャーがいた。

『何者だ貴様！！』

敵にはもう何が何だかわからず、相手に問いかけた。

「あら、先ほどまで見ていた存在を忘れたとは、随分と馬鹿ですね。 貴方。」

『何！？』

敵は相手の言った事に動揺しつつ、相手を見た。

相手はストレンジャーを支えたままゆっくりと立ち、こちらを見た。

その姿は、黄色い布を身につけた、灰色の狼だった。

「自分はラブソディ・ウルフ。 この身にフェンリルの意思を染めし存在。 貴方が行った罪なき者に与えた罪、償って頂きます。」

ラブソディはこちらを見つつ、そう言った。

『何をふざけた事を！！』

相手はそう言うと、ラブソディに襲い掛かってきた。

ラブソディはストレンジャーを抱え片手に傘を召還し、その場でジャンプをして相手の攻撃をかわした。

攻撃をかわしたラブソディはそのままビルの屋上へと降り立った。

『くそっ！ 降りて来い！！』

相手の言った事を聞きつつ、ラブソディはストレンジャーをビルの上に置き、傘を差したまま下へと降りていった。

「それでは、ショータイム込みのフィナーレとさせていただきます！！ ファーブ！！」

ラブソディは下へと降りたまま、左手に炎を召還し、相手に攻撃した。

相手は上空からの炎攻撃を避けられず、当たってしまった。

『ぐわっ！！ 貴様！！』

相手は炎を浴び、暴れていたがすぐに炎が消え、上空にいたラブソディに攻撃をした。だがラブソディは相手の攻撃を傘の角度を変えて避けた。

「アニティグロース！！」

ラブソディはその場所から攻撃態勢になり、相手に連発で雷攻撃を繰り返した。相手は空中のため避けることが出来ず、直で喰らった。そして地上へと叩きつけられた。

『クッ！』

「終わりです。 デスサーベルス！！」

ラブソディは地上へ降り立ち、相手の近くへ行き手にスペードを象った剣を召還し、相手を切った。

敵は真っ二つに切れ、霧の粒子となって消えてしまった。

ラブソディはその霧の粒子をクローバーに収集した。

すると、敵が消えたところから風が吹いてきた。

風はその場から移動し、どこかへ吹いて行ってしまった。

「ラブソディの力。」

ラブソディに変身していた夏菊は元の姿へ戻り、自分の手を見た。

自分の別の姿として作った存在。 その存在は自分を守れ、相手も守れるほどの力を秘めていた。

「マスター！」

夏菊は不意に上空から声が聞こえ、上を見た。

するとそこには先ほどの状態とは違い、元に戻ったストレンジャーが降りてきた。

「ストレンジャー君！ もう大丈夫ですか？」

夏菊はストレンジャーに状態を聞くと、ストレンジャーは首を縦に振り、体を動かして無事を夏菊にアピールした。

「よかった。」

「あの時のマスターの姿でしたね。 その力はやっぱりすごいな。」

「自分自身でもありますからね。 それなりの力は、やっぱりあるのでしょうか。」

夏菊は先ほどまでの自分を思い出し、そう言った。

「そうだ。 先ほどの迷人は大丈夫でしょうか・・・」

夏菊は先ほど急遽クローバーの中に入れた迷人を召還した。

すると先ほどまで弱っていた姿は無く、少し元気になっていた。

「あの、大丈夫ですか？」

『はい・・・ありがとうございます・・・』

迷人は形を少し人間に近づけ、夏菊にお礼を言った。

『あの・・・先ほどのクローバーは・・・』

「これは、自分が作ったオリキャラの存在を認めた証です。」

夏菊はクローバーを相手に見せ、説明した。

「今、存在価値を失ってしまった迷人を集めているんです。 皆さんに少しでも存在価値を与えることが出来ればと思ひまして・・・」

『本当・・・ですか・・・？』

「はい。 貴方は、いかがしますか？」

夏菊は確認のため、迷人に問いかけた。

『もちろん・・・お願いいたします・・・ ・・・他の方々も・・・よろしいですか・・・？』

「ええ、この近くにいるんですか？」

夏菊は辺りを見渡すと、いろいろな方向から気配がした。

『よろしい・・・でしょうか・・・』

「もちろんです。 さあ皆さん、この中へどうぞ。」

夏菊はクローバーを手のひらに乗せ、上へ掲げた。

するとさまざまな方向から迷人が大量に集まり、クローバーの中へ入って行った。

夏菊にすこし衝撃が来たが、倒れずに立って受け止めた。

夏菊の目の前にいた迷人は他の迷人が入ったのを確認すると、お辞儀をし、クローバーの中へ入って行った。

「すごい数でしたね・・・」

「ああ、だがこれでほぼ全員、救われたな。 さっきの奴が迷人を苦しめていた親玉で、そこにいた迷人達。 全部とまでは行かないかもしれないが、ほぼ全員とはいえるな。」

「よかった。」

夏菊は持っていたクローバーを握り締め、胸の前に持っていった。

「これで、救われたんですね。」

「ああ、マスターのおかげだぜ。」

「ありがとう、ストレンジャー君。」

夏菊はストレンジャーにお礼を言うと、もと来た道に戻り、家へと帰って行った。

夜間に潜む影

「ただいまー」

夏菊が家に帰ると、外はもうすでに夜になっており、空には月と星が光っていた。

「お帰りなさい、随分と遅かったわね。」

家に入ると母親がリビングから出てきて夏菊に言った。

「ごめんなさい。 ちょっと遠くまで行って来たので遅くなりました。」

夏菊は素直に母親に言った。

母親はそれ以上夏菊をとがめず、お風呂へ入ってらっしゃいと進めた。

夏菊は素直にその言葉を受け入れ、バスルームへ向かって行った。

「ううーん。 気持ちいい～」

夏菊は体と髪を洗い終わると湯船に入り、今日の疲れを癒していた。

「今日は結構動き回ったからな。 お疲れ様。」

そんな夏菊の様子を、ストレンジャーは浴室とは別のバスルームの入り口近くに座り、夏菊に言った。

夏菊はストレンジャーの言ったことを聞きつつ、浴室に付けられていたテレビをつけた。

『・・・ぎ次と患者数は増え、市民は恐怖を抱いているようです。』

「？」

夏菊はテレビを付け写ったニュース番組を見つつ疑問に思った。

よくわからないが事件が起こっているようだった。

テレビ画面はどこかの病院を写していた。

『突如増えた記憶喪失患者は、若い世代に多く、今までの記憶は全部失っている模様。 共通点はいまだに不明です。』

「記憶喪失患者？」

夏菊はニュースの司会者の言った事を気にしつつテレビを見た。

入り口にいたストレンジャーは夏菊の言った事が気になり、浴室へ入ってきた。

「どうしたんだ？」

「よくわからないけど、記憶喪失の患者が増えてるみたい。」

「記憶喪失？」

ストレンジャーも同様に夏菊と共にテレビを見た。

テレビは病院を写し終わると、記憶喪失について説明していた。

「記憶喪失って、そんなに頻繁に起こるものなのかな・・・」

「いや、ほとんどの場合心身に関する病気の次の症例として発症するくらいだ。あとはマスターの時と同様に頭部による外部からの衝撃を受けた時に出るくらいだ。」

ストレンジャーは一通り知っている知識を夏菊に伝えた。

「じゃあそんなに多く出るなんてありえないはずだね。しかも若い世代ばかりなんて。」

「何かこの事件には裏がありそうだな。」

ストレンジャーは夏菊と共にテレビを見つつそう言った。

その後バスタイムを終えた夏菊はディナーを食べ終わると、自室へ戻っていった。

「うーん。 やっぱりさっきの事気になるね。」

夏菊はベッドに腰掛け、入浴中に仕入れた情報を考えていた。

「ああ、確信は出来ないが、何かしら裏で操っている奴がいるはずだからな。」

「記憶喪失。自分はそこまで強くは無かったから大丈夫だったけど、他の人はもっと深刻なものみたいだね。」

「何が起こっているんだろう。」

ストレンジャーは考えつつ言った。

夏菊は部屋に置いておいたクローバーを手に取り、見つつ考えていた。

「・・・召還！」

すると、夏菊は不意にクローバーに願い、オリキャラを召還した。
出てきたのはビリーブだった。

「どうしたんだ？ マスター」

ストレンジャーは不意に夏菊が取った行動に驚きつつ問いかけた。

「ちょっとね。 ビリーブさん、このクローバーの中にいる迷人の方々と、お話って出来ますか？」

夏菊はストレンジャーからの問いかけに軽く答え、ビリーブに問いかけた。

「あの方々とですか？ 一応話は出来ますよ。 外にいた時より落ち着いて話が出来るといいますし。」

「では、先ほどまで自分が話していたことを聞いてきて欲しいんです。 内容はストレンジャー君が知っていますので。 スtrenジャー君もお願い出来ますか？」

「ああ、何か気になることがあるのか？」

ストレンジャーは夏菊からの申し出にOKを出しつつ聞き返した。

「記憶喪失の患者の中に、以前のマスターがいるかどうか聞いてみたいんです。 患者の方々が作り出した存在で、記憶を失われて迷人になったのなら、この事件との関係が見つかると思って。」

「なるほど、確かに無いとはいいい切れないな。 了解だぜ。」

「では、お願いいたします。」

夏菊はそう言うと、ストレンジャーとビリーブをクローバーの中に戻した。
そして、ストレンジャーが留守のため、変わりにピスフリーを召還した。

「どうしましたか。 マスター」

ピスフリーはあたりに敵がないことを確認し、夏菊に問いかけた。

「ストレンジャー君が留守の間、自分といて欲しいなって思いました。他に交友的で同姓の方がいないので。」

夏菊は少々言葉に困りつつ、ピスフリーに言った。

「そうですか。俺でよければ。」

「ありがとう。ピスフリーさん。」

夏菊はピスフリーにお礼を言うと、電気を消してベッドの中へ。

ピスフリーはベッドに入った夏菊に誘われるがまま、靴を脱ぎベッドの下へ置き、夏菊の隣に入った。

「お休みなさい。」

夏菊はピスフリーにそう言うと、目を瞑り寝てしまった。

ピスフリーはそんな夏菊の様子を見つつ、夏菊の頭を軽く撫でた。

『見た目は青年でも、中身は子供って感じなんだな。なんか、俺と少し似てるな。』

ピスフリーは自分の額に付けていたバンダナを見つつ目を瞑った。

「お休みなさい。」

ピスフリーは隣で先に寝てしまった夏菊に言いつつ、寝てしまった。

そんな2人の様子を、窓の外から伺っている人物が。

「あいつか。」

影は夏菊を見つつ呟いた。

「1度お目にかかりたいとは思っていたけど、随分と普通ね。」

隣にいたもう1人の小さい影も、同様に呟いた。

「アリス様が気になっているのはいいが、なぜ気になっているのかわからないんだよな。」

大きいほうの影は夏菊を見つつそう言った。

だが見た目と気になっている人物の言っていたことが余り類似しないため、少々首をかしげていた。

「でも、それなりに力があるのかしらね。意味も無く私たちにお問い合わせすることも無いのだから。」

小さいほうの影は、大きい影に問いかける感じに言った。

「まあ、時機にわかるさ。いったん引き上げるぜ。」

「了解。」

2つの影は意見がまとまり、その場から消えて行った。

そんなやり取りをされていたことを夏菊達は知らずに、街に朝がやってきた。夏の暑い日差しが、夏菊とピスフリーの顔面に降り注いだ。

「ううーん。」

夏菊は目が覚めると、ゆっくりと体を起こした。

隣にはまだ寝息を立てているピスフリーがいた。

『起こしたら悪いよね。』

夏菊はピスフリーにタオルケットをかけ、朝食を取りに行った。

「おはよう母さん。」

夏菊はキッチンにいた母親に声をかけた。

「おはよう夏菊。 今日も早起きね。」

「うん。」

夏菊はいつものトークをしつつ、朝食を用意して食べ始めた。

それからしばらくして、夏菊が朝食と身支度を終え、自室に戻ってきた。

「あ、おはようマスター」

夏菊が部屋に戻ると、睡眠から目が覚めたピスフリーがベットを直していた。

「おはようピスフリー よく眠れた？」

夏菊はこちらの世界では寝たことが無い、ピスフリーに問いかけた。

「ああ、こっちの世界で寝たことは無かったが、悪くなかったぜ。」

「それはよかった。」

夏菊はピスフリーからの感想を聞き、一安心のご様子。

「あ、そろそろストレンジャー君達ももう起きたかな。」

夏菊はそう言いつつ、テーブルの上に置いたクローバーを手に取り、握った。

「召還！」

夏菊はそう言うと、クローバーの中からストレンジャーとビリーブが出てきた。

「おはようマスター。 ピスフリー」

「おはようございます。 マスター。 ピスフリーさん。」

2人は出てきたのと同時に、夏菊とピスフリーに朝の挨拶をした。

「おはようストレンジャー。 ビリーブ。」

「おはようございます2人とも。 あの後どうでしたか？」

夏菊はベットに腰掛け、ストレンジャーとビリーブに夜の成果を聞いた。

「はい。 マスターの行っていた事は当たっていましたよ。」

「ほとんどの迷人達に、病院にいる患者達の顔を見てもらったが、全員元マスターだった人達だったぜ。」

ビリーブは夏菊の行っていた事が当たっていたことを報告し、ストレンジャーは具体的にどんな事だったかを報告した。

「だとすると、病院に入院している患者の皆さんが元マスター。 こんな偶然あるんですね。」

夏菊は報告を聞き、入院している患者の共通点を見つけた。

「誰がやっている事かはわからないが、オリキャラを持っているマスターを狙っているのか？」

ストレンジャーは事件の黒幕の行っている目的を推測した。

「違うとは、言い切れませんね。」

「だとすると、俺達のマスターも危ないわけだな。」

ピスフリーはそう言うと、夏菊を見た。

「自分なら大丈夫です。 自分自身を守れる力がありますし、守ってくださる皆さんもいるんですから。」

夏菊はそこまで心配はせず、ストレンジャー達を見つつ言った。

「そうだな。 黒幕の思い通りにはさせない。」

「俺達を守るからな。 マスター。」

「ありがとうございます。 ストレンジャー君。 ピスフリーさん。 ビリーブさん。」

夏菊は改めて3人にお礼を言った。

「では、今日も着替えて散策に行きましょうか。」

「了解だぜ、マスター。」

夏菊はピスフリーとビリーブをクローバーの中へ戻すと、服を着替え始めた。

勇敢で寂しがり屋な元迷人

夏菊は服を着替え終わると、母親に声をかけ、ストレンジャーと共に外へ出かけて行った。外は曇り空。だが暑さは昨日と変わらなかった。

「さて、今日は何処へ行こうかな。」

夏菊は自転車を出しつつ、行き場所を考えた。

「せっかく情報を仕入れたんだし、例の病院に行ってみないか？」

「ああ、事件で報道されてた病院ね。確かここからでも行ける距離だし、ちょっと遠いけど行ってみようか。」

夏菊は家から例の病院までのルートを思い出しつつ、ストレンジャーに言いつつ自転車を扱ぎ始めた。

ストレンジャーは頷き、羽を広げ、夏菊の後に続いて飛んでついて行った。

夏菊が自転車を扱いで向かった先は、事件で報道されていた隣街の病院だった。

比較的大きな病院で、外面が綺麗な白のペンキで塗られており、とても清潔な雰囲気を出していた。

夏菊が病院の近くへ到着し、病院を見た。

「あー、やっぱり報道されていたってこともあるね。マスコミがいっぱい・・・」

夏菊は大体察しが付いていたが、大量のマスコミを見て、少々気が滅入った。

「だがマスター。あんなにマスコミがいる中、どうやって潜入するんだ？」

夏菊の隣に降り立ったストレンジャーは夏菊に問いかけた。

「普通に面会として入りたかったけど、この様子だと駄目だね。よし、裏に回って、上から潜入しようか。」

「なんかスパイ活動みたいだな。」

夏菊の提案にストレンジャーは軽く突っ込み、2人は軽く苦笑しつつ、病院の裏に回って行った。
そして2人はマスコミの集団に気が付かれない様裏手へ回り、近くの茂みに自転車と一緒に潜った。

「よし、ここからなら誰にも見つからないね。」

夏菊は茂みから顔を出し、辺りに誰もいない事を確認した。

「俺はいいとして、マスターはどうやって入るんだ？」

ストレンジャーは普通に考え、夏菊の潜入方法を聞いた。

「大丈夫。 そこも考えてあるよ。」

夏菊はそう言うと、両手を胸の前で組み、目を瞑った。
すると夏菊を光が包み込み、夏菊は人間の姿から狼の姿に変わった。

「なるほど、ラブソディで潜入するのか。」

ストレンジャーは感心しつつ、ラブソディに姿を変えた夏菊に言った。

「じゃ、潜入しよっか。」

ラブソディはそう言うと、手に傘を召還し、ジャンプをして風に乗り上昇して行った。
ストレンジャーはラブソディが無事上がれるよう先に病院の屋上へ昇り、辺りに人がいない事を確認すると、ラブソディを屋上へ導いた。
ラブソディは病院の屋上へ到着すると、元の姿である人間に戻った。

「さてさて、お目当ての方々は何処にいるのかな・・・」

夏菊はゆっくりと屋上と病院を仕切る扉を開け、病院内へ潜入した。

病院内は明るい時間帯にもかかわらず、少々薄暗かった。
夏菊とストレンジャーはなるべく物音を立てないように廊下を歩き、記憶喪失患者を探した。

だが大きな目の病院という事もあり、どの患者がそうなのかわからなかった。

『困ったなー 人名まではニュースに出てなかったからわからないよ。 抜かったなー』
「さすがにプライバシーの関係とかいろいろあるからな。 公に名前は出ないだろ。」

夏菊は少々毒付きつつ、病院内を歩き回った。

ストレンジャーは夏菊の先頭に立ちつつ辺りを伺い、病院内のスタッフに会わないよう見ていた。

『あ、そうだ。 最初っからナースステーションとかに行けばわかるじゃん。』

ふと夏菊は思い、壁に取り付けてあった案内図を見た。

「だけど俺達は一応不法侵入者だぜ？ 面会したらお縄でもおかしくないぜ。」

ストレンジャーは少々心配しつつ、夏菊に言った。

『そんなこと無いよ。 第一自分が聴きに行くんじゃないかって、ストレンジャー君が聞きに行くんだから。』

「あ、そう言うことか。 って、俺は目に見えないのにどうやって聞くんだ？」

ストレンジャーは夏菊の意見を聞き、ふと疑問に思い聞き返した。

『もちろん、立ち聞きだよ。』

「あんまし気が向かないけどな。 立ち聞きなんて。」

『・・・それもそうだよな。』

ストレンジャーは少々困りつつ、夏菊に言った。

夏菊はストレンジャーの行った事を気にし、さすがにそれとは、立ち聞きは止めた。

『・・・じゃあ、もっと効率がいい方法にしようか。』

夏菊は新しい策が思いつき、人目に付かない物置内に移動した。

ストレンジャーも同様について行く。

夏菊は小さな物置に入り、ドアを閉めた。

「どうするんだ？」

ストレンジャーは夏菊の思いついた方法を聞きに入った。

「一番わかりやすい方法。それは、この中にいる迷人に見てもらおう事だよ。」

夏菊は持ってきたクローバーを出しつつストレンジャーに言った。

「なるほどな。当事者である迷人なら、見ただけで区別が付くからな。」

「容量ももう貯まったし、デザインももう出来上がってるから、後は召還して見てもらうだけ。ただ、皆の記憶が混じってしまうのが厄介だけどね。」

夏菊はそういいつつ、クローバーを手に握りしめた。

「それは仕方ないことさ。それに、記憶は古いのも大事だが、新しい記憶も大切さ。気にする事は無いよ。」

「ありがとう。ストレンジャー君。」

夏菊はストレンジャーからの励ましを受けつつ、新しいオリジナルキャラクターの召還体制に入った。

『捨てられた、失われてさ迷い続ける迷人よ。新たな力、存在価値を与えるべく、我の前に姿を現せ。新たなマスター、四神夏菊の名の下に！！』

夏菊は心の中でそう唱え、クローバーを天に向けた。

するとクローバーは強く輝き、部屋一面を強烈な光で照らした。

ストレンジャーは光が眩しくて見ていられず、目を瞑った。

しばらくして、クローバーの輝きが落ち着き、静かな時間が再びやってきた。

ストレンジャーはゆっくり目を開けると、目の前に見たことが無い存在が膝を付いて、夏菊の前

に座っていた。

「ありがとうございます。 新たなるマスター、四神夏菊。」

夏菊の前に座っていた存在は、始めに夏菊にお礼を言った。

「皆さんの意思の塊として、貴方が生まれました。 もう存在価値を見失わずに済むはずですよ。 お立ちなさい。」

夏菊は座っていた存在にそう言うと、座っていた存在はゆっくりと立ち上がった。 その姿はダークグレーのボディに黒い翼と角。 胸に赤き鎖が繋がれたガーゴイルだった。

「貴方は今日から、『ブラベリー・ザ・メテオリーツ』として、生きなさい。」
「自分の名は、ブラベリー・ザ・メテオリーツ・・・」

ブラベリーと呼ばれた存在は、自分の姿を見つつ言った。
スタイルはストレンジャー達同様、人に近づけた動物。 擬人化だった。

「では、ブラベリーさん。 今日から一緒に生きましょう。」
「はい。 マスター」

ブラベリーは夏菊にそう言うと、改めて礼をした。

「ではブラベリーさん。 早速ですが、貴方方の元マスターがいるとされるこの病院で、元マスターを探してもらってもいいですか？」
「仰せの、ままだ。」

ブラベリーは夏菊からの案を受け入れ、丁寧な言葉使いで言った。

「よし、じゃあ行動再開だな。」

ストレンジャーはそう言うと、物置の扉を開け、病院の廊下へと足を出した。 その後をブラベリー、夏菊が続いて廊下へ出て、行動を再開した。

「今の見た？」

夏菊達が部屋を出ると、物置の窓の外に、昨日の夜に夏菊達の様子を伺っていた2人の人影が出てきて言った。

「ああ、アリス様が言っていた力の持ち主はアイツだな。　すさまじい力だ。」

「失われた存在価値を再び与えるなんて、普通のマスターでは出来ないからね。」

2人は口々にそう言い、別の窓から3人の様子を気づかれないように見ている。

「そうしたら、早速行動に移らせてもらう事にするか。」

「そうね。　早く仕事を済ませましょう。」

2人はそう言うと、3人を見張るのを止め、どこかへ行ってしまった。

その影の姿は、黄色いボディの獣と、羽を生やしたリスだった。

病院内を散策する夏菊達一行。

病院一室一室をなるべく物音を立てないように見て周り、ブラベリーの記憶に残っているマスターを見て回った。

そしてほぼ全員の入院患者を見終わり、結論が出来た。

この病院で入院している記憶喪失患者は皆、夏菊が考えていたことが的中していたことが発覚した。

「やっぱり患者さん達は皆、迷人達の元マスターだったんですね。」

夏菊は散策が終了し、1回病院の屋上へ出てきた。

「マスター、記憶喪失、自分、忘れてた・・・　複雑、気持ち・・・」

ブラベリーは自分の中に眠るほかの迷人達の意思を通じてそう言った。

自分自身を作ってくれたマスターが記憶を無くし、自分達の存在価値を無くしてしまい、さまよっていた。

ブラベリーは段々と心苦しくなり、自分の胸の周りについている鎖を握った。

夏菊はそんなブラベリーの様子を見て、ブラベリーをやさしく抱いた。

「迷人となってしまった事はもういいんです。 元マスター達は訳があって皆さんの記憶をなくしてしまいました。 それに今は自分が新しいマスター。 もう皆さんを忘れたりはしませんよ。」

夏菊はそう言うと、ブラベリーは涙を流した。

「マスター 自分、どうしたら・・・」

ブラベリーは自分はどうすればいいのかわからなくなり、涙を流しつつ夏菊に言った。

「元マスターを忘れることは出来ないかもしれません。 でもその方々を攻めてはいけません。 相手を傷つけると、自分も傷つけてしまうから。 そのことだけは忘れないで。」

「マスター」

ブラベリーは夏菊を強く抱き返した。

「わかりました。 そのことを肝に銘じます。」

「もう皆さんを迷人にはしません。 その胸の鎖は、関係を繋ぎ止める意味もあるのですよ。」

「この鎖が・・・」

ブラベリーは夏菊から離れ、自分の胸の辺りに絡みつ়く鎖を見た。

背中から出ているその鎖は、左右の肩と腰の辺りに延び、左胸の前に集まっていた。

鎖はブラベリーの体に流れる血液の色をしていた。

「この鎖は貴方との関係を留めるだけでなく、命を留めている物でもあります。 切れないように気をつけてくださいね。」

「はい。 マスター」

ブラベリーは自分が本当にマスターと繋がれている事を確認し、安心感に浸った。

「それと、これも渡しておきますね。」

夏菊はそう言うと、手に新しいクローバーを召還し、ブラベリーに手渡した。

「これが、迷人だった皆さんが求めていた、『マスターが本当に存在を認めた証』です。これがあれば、絶対に皆さんを見捨てません。」

「ありがとうございます。 マスター。」

ブラベリーは夏菊からクローバーを受け取り、握り締めた。

「ではそろそろ戻りましょうか。 お昼時がもう近づいてますから。」

夏菊はラプソディに変身しつつ、ストレンジャーとブラベリーに言った。

「了解だぜ、マスター」

「帰りましょう。」

2人は翼を広げ、自転車を置いてある茂みに向かって降りて行った。

ラプソディは傘を召還し、ゆっくりと下へ下降して行った。

そして茂みの中へ降り立つと、ラプソディは人間の姿に戻り、自転車で家へ帰って行った。

ストレンジャーとブラベリーは翼を広げ、夏菊と共に帰って行った。

目視する家族

夏菊達が自転車を扱いで数十分。
夏菊達はお昼の鐘の音と共に家へ到着した。

「ただいまー」

夏菊は少々汗をかきつつ、家へ入った。

「お帰りなさい夏菊。 あら、随分と汗をかいたみたいね。」

母親は夏菊の着ていた衣服と夏菊の体を見つつ言った。

「結構日差しが強くて、暑かったんだ。」

夏菊は少々暑いご様子で、手で仰ぎつつ言った。

「とりあえずシャワーを浴びてきなさい。 お昼の用意しておくわ。」

「はい。」

夏菊は母親にそう言われ、靴を脱いでバスルームへ向かって行った。
ストレンジャーとブラベリーも同様に家へ入った。

「夏菊。 この子達はどちら様？」

ふと母親はストレンジャーとブラベリーを見つつ、バスルームへ向かおうとしていた夏菊に言った。

「母さん。 2人が見えるの？」

「ええ。 始めましてお2人方。」

夏菊の母親はそう言うと、膝を曲げ、ストレンジャーをブラベリーの目線で言った。

「始めまして、ストレンジャー・ザ・ドラゴンといたします。 お母様。」

「自分は、ブラベリー・ザ・メテオリーツといたします。」

2人はとりあえず夏菊の母親に自己紹介した。

「始めまして、夏菊の母です。 夏菊と仲良くしてね、ストレンジャーさん、ブラベリーさん。」

夏菊の母親はそこまで動揺はせず、普通に2人を会話をしていた。

何処であったかなど、夏菊の母親は散策はせず、2人にもシャワーを浴びていらっしゃいと言った。

ストレンジャーとブラベリーはそう言われ、夏菊の後について行った。

「まさか母さんまで見え始めたなんてな。 ちょっと予想外。」

夏菊はシャワーを浴びつつ言った。

「確かにな。 始めの頃は全然何も言わなかったからな。」

「マスター以外にも見える人がいた。 ビックリしました。」

ストレンジャーとブラベリーは、夏菊がシャワーを浴び終え、交代でシャワーを浴びた。もちろん先ほどまで来ていた服は脱いでおり、靴も同様にバスルームの外へ置いてあった。なので、今は何も身に付けていない。

「でもそこまで動揺しなくてよかった。 説明がちょっと難しいからね。」

「そうだな。 それに受け入れてくれただけでも、俺達にはいい事だしな。」

3人はシャワーを浴び終え、バスルームを後にした。

それからバスタオルでそれぞれ体を拭き、服を着た。

「ふう、さっぱりしたー」

夏菊はそう言いつつ、キッチンへやってきた。

「皆さん。 ご飯ですよ。」

夏菊の母はそう言うと、ストレンジャー達に分まで食事を用意してくれていた。
今日のランチはサンドイッチだった。

「たくさん食べてね。」

「ありがとうございます。」

ストレンジャーとブラベリーはお礼を言いつつ、席に着いた。

「いただきまーす。」

3人はお昼ご飯を食べ始めた。
おいしそうに食事をする3人を、夏菊の母は嬉しそうに見ていた。

その後食事を終え、3人は自室へ戻ってきた。

「ふう、おいしかったー」

夏菊はランチをたくさん食べ過ぎたのか、ベットの上に横になった。

「自分達まで、食べてよかったのかな。」

「こっちに来て普段食べなかったからな。」

ストレンジャーとブラベリーは口々にそう言った。

「せっかく用意してくれたんだし、断る理由も無いから大丈夫だよ。 それに家族なんだから。」

夏菊はベットから起き上がり、2人に言った。

「家族。」

「そう、家族。 皆とは友達じゃなくて、かけがえの無い存在、家族なんだよ。」

夏菊は笑顔で2人に言った。

ストレンジャーとブラベリーは顔を見合わせ、微笑んだ。

「初めて、家族になれた気がする・・・」

ブラベリーはふと思いそう言った。

以前までの生活で、マスター以外の人とは会話をしたことが無かったからだ。

「ブラベリーには初めての事だらけだからな。　そこまで深く考えなくても大丈夫だぜ。」

「・・・今の姿になって、新しい人生が始まったから。　新しい事だらけ。」

「それに、他の家族だってブラベリーの事を認めてくれるよ。　皆優しいからね。」

夏菊はそう言うと、クローバーを手に取り、他のオリジナルキャラクター達を召還した。

クローバーは光を出しつつ、中から他のキャラクター達を出した。

「紹介するね。　新しく皆さんの家族になった。」

「ブラベリー・ザ・メテオリーツです。　よろしく。」

夏菊はまだ会ったことの無いキャラクターを、紹介した。

「始めまして、ブラベリーさん」

「よろしくな、ブラベリー」

「これから、一緒に過ごそうね。」

「よろしく。　ブラベリー。」

他のキャラクター達は口々にブラベリーに話しかけ、仲良くなった。

「じゃあマスターの体調もあるだろうから、俺達はそろそろ戻るぜ。」

しばらく話をしていたキャラクター達。

不意にコレージはそう言い、夏菊を見た。

「自分なら大丈夫だよコレージさん。　皆さんが長く外にいられるように自分も慣れとかな
いと。」

夏菊は笑顔でコレージに言った。

だがその表情は少々無理をしつつ言っている事を、コレージは知っていた。

「だったら、一気にじゃなくて、少しずつ出していくようにしな。いきなり7人はきついんだろ？」

「コレージさんには適いませんね。わかりました。」

夏菊は素直にコレージにそういい、クローバーの中へビリーブ、コレージ、ブラベリーを戻した。

外に残ったのは、ストレンジャー、アルドール、ピスフリー、ジョイだった。

「じゃあ自分はちょっと夏季課題を片付けるから、お話でもしてて。」

夏菊はストレンジャーにそう言い、机に向かった。

ストレンジャーはそんな夏菊の様子を見て、平気な事を確認すると、会話を始めた。

久しぶりに仲良し4人組が一緒になれ、話が弾んでいた。

ストレンジャーもなかなか一緒になれなかったこともあり、楽しそうだった。

夏菊はそんな楽しそうなやり取りを聞きつつ、夏季課題の片付けに取り掛かった。

夏の旅行先

そしてしばらく時間が過ぎ、夕方。
夏菊は一通りの夏季課題を済ませ、一息ついた。

「ううーん。 ようやく終わった～」

夏菊は椅子に座ったまま、背中を伸ばした。

「お疲れ様。 マスター」

夏菊の部屋にいたストレンジャーは夏菊の様子を見つつ、そう言った。
先ほどまで会話をしていたため、アルドール達も同じように夏菊へ言った。

♪～～♪～

夏菊が課題を一通り終わったのとほぼ同時に、携帯が鳴った。
夏菊は携帯を手に取り、見た。
すると携帯はメールを受信しており、差出人は藍樹からだった。

『明日の海、集合は朝7時、星屑駅の駅前に集合だぜ！ 遅れるんなよー』

明日の予定となっていた海の企画の集合時間と場所が書かれていた。

「そっか、海に行く予定、もう明日になってたんだ。」

夏菊は携帯を見つつ言った。
ストレンジャーは立ち上がり、夏菊が見ていた携帯の画面を見た。

「結構ドタバタしてたからな。 時間が過ぎるのは早いな。」

「あら、海に行くの？」

同じ部屋にいたジョイは夏菊とストレンジャーに問いかけた。

「ああ、マスターの友人が出した提案でな、ジョイ達も行くだろ？」

「もちろんよ！ こっちの海でも泳いでみたかったんだー」

ジョイは嬉しそうに2人に言った。

趣味の水泳が出来るためか、嬉しそうだ。

「私達も行って大丈夫かしら？」

「まあ見えてなかったらどの道関係ないんだろうけどな。」

アルドールとピスフリーは不意にそう思い、言った。

「藍樹達もストレンジャー君達が見えるんだ。 それに、大勢の方が楽しいから、皆OKしてくれるよ。 それに蘭さんの所の車で行く予定だから、普通に会話も出来るよ。」

夏菊は笑顔で言った。

「よかったー」

「じゃあ俺達も一緒に行かせてもらえるのか。 楽しみだな。」

4人は口々にそういい、明日の海が待ち遠しそうだった。

夏菊はそんな4人の様子を見つつ、美津華の所へ電話をかけた。

「もしもし、蘭さん？ 明日の海なんだけど、ストレンジャー君達、大丈夫そう？」

『ええ、会話をしてても大丈夫なようにちゃんと策は練ってあるわ。 リムジンタイプを用意してあるから安心して。』

「よかった。 あとストレンジャー君以外にもたくさんいるから、それも平気？」

『もちろん大丈夫よ、大きいタイプだからね。 それにいろんな人に会えるなんて今から楽しみだわ。』

「それなら安心だね。 ありがとう蘭さん。」

『気にしないで、じゃあ明日ね。 よろしく。』

「うん。 よろしくね蘭さん。」

夏菊は美津華との会話を終え、電話を終えた。

「大丈夫だった？」

アルドールは電話を終えた夏菊に問いかけた。

「うん。 リムジンタイプの車で行く予定だから、皆を出した状態で行っても大丈夫だよ。 会話もちろんOKだよ。」

「よかったー そうなると本当に楽しみね。」

「明日はマスターの友人に会えるのか。 どんな人たちなんだろうな。」

3人は楽しそうに会話をしつつ、明日を楽しみにしていた。

ストレンジャーはそんな3人を見つつ、夏菊に話しかけた。

「迷人の件は大丈夫か？」

「遭遇しなければ大丈夫だと思う。 それに、皆に危害を及ばせないように、人目の付かない所で何とかしないとね。」

夏菊は少々心配しつつ言った。

「とりあえず、俺達もマスターの友人達に気が付かれない様に対処はするから。」

「ありがとう、ストレンジャー君。」

夏菊はストレンジャーからの提案を受け入れ、お礼を言った。

「じゃあ、そろそろもう一人出そうか。」

夏菊は4人が出ていても平気になったと思い、クローバーからもう一人召還した。出てきたのはコレージだった。

「マスター、出てきて早々言うのは何だが、あんまり無理はしないでくれ。」

コレージは少々遠慮がちに夏菊に言った。

顔はそこまで心配してなさそうに見えるが、言葉は心配している様子だった。

「大丈夫だよ。 心配しないで。」

夏菊はコレージにそう言い、安心させた。

「夏菊一 ご飯よー」

夏菊達が部屋で話をしていると、下から母親の声がした。

「あ、もうそんな時間だったんだ・・・」

夏菊は部屋に置いてあった時計を見て時間を確認し、下へ向かって行った。

ストレンジャー達も同様に下へ降りて行った。

夏菊が下へ降りると、キッチンにはおいしそうなディナーがたくさん出ている。

夏菊の母はストレンジャー達が食べる事も考えて、たくさん料理を作ってくれたようだ。

「さ、皆さん、たくさん食べてね。」

夏菊の母は笑顔で夏菊とストレンジャー達に言った。

「うわあ～ おいしそう！！」

「いただきまーす！！」

アルドール達はキッチンのテーブルに並べられていた沢山のおいしそうなディナーを見て感想を言いつつ、食べ始めた。

「おいしい～！！」

「本当だ。 美味いぜこの料理！」

「お母様、おいしいですよ！」

皆は美味しい料理を口にし、さらに感想を言った。

「喜んでもらえてよかったわ。 たくさん食べてね。」

夏菊の母は笑顔で食事を食べるアルドール達を見て、頬笑んで言った。

「いただきまーす。」

夏菊も同様にディナーを食べ始めた。

その後、ストレンジャー達は食事を終わると、夏菊より先に部屋に戻った。
夏菊は食事を終わると、シャワーを浴びて部屋に戻って行った。

「うーん。 ちょっと食べ過ぎちゃったかなー」
「たくさん食ったから動けないぜ・・・」

夏菊が部屋に戻ると、たくさん食べて満腹なのか、皆は部屋に座っていた。
ピスフリーだけは、ベッドの上で仰向けになっていた。

「美味しかったですか？ 料理。」
「ああ、とっても美味しかったぜ。」

ピスフリーはベッドの上に横になったまま、夏菊に言った。

「俺達の世界であそこまで美味しいのは早々無いからな。」
「多分あの美味しさまで味が出せるのは、ストレンジャーぐらいじゃない？」

アルドールはふと思ひ、ストレンジャーに言った。

「俺の料理は、そこまで美味しくないぜ？」
「でも、ストレンジャーの料理が美味しいの事は、皆知ってるわよ。」
「そうだな。 余り食べたこと無いがこの料理と同じぐらい美味しいからな。」

ジョイとコレージは口々にそう言った。

「ストレンジャー君、料理上手だもんね。」

夏菊もストレンジャーが料理が上手なことは知っているため、皆と同じように言った。

「そうかな。 ありがとう皆。」

ストレンジャーは皆からの褒め言葉を聴き、少々照れつつ言った。
余りストレンジャーが照れている所を見ないため、夏菊はそんなストレンジャーを見て苦笑しつつ明日の用意をしていた。

「じゃあ、そろそろ私達も戻ろうか。」

「そうだな。 さすがに皆がここで寝るわけには行かないからな。」

アルドールはふとそう言うと、皆は立ち上がった。

「お帰りになりますか？」

夏菊はふと皆を見つつ言った。

「ええ、また明日の朝呼んでください。」

「わかりました。 お休みなさい皆さん。」

「おやすみなさい、マスター。」

「お休み、皆。」

夏菊はクローバーを手にし、ストレンジャー以外の皆をクローバーの中へ戻した。
アルドール達が居なくなると、部屋は静かになった。

「じゃあ自分達もそろそろ寝ようか。」

夏菊はそう言いつつ、ベットを直して中へ入った。

「そうだな。 明日は早いみたいだからな。」

ストレンジャーも同意し、靴を脱いでベットの下へ置き、電気を消した。
夏菊が入ったベットの隣に、ストレンジャーは入った。

「お休み、ストレンジャー君。」

「お休みなさい、マスター。」

2人は一緒のベットの中で目を瞑り、寝てしまった。

真夏の台風一過

夏菊達が寝てしばらく、街に夜が終わって再び朝がやってきた。

今日もいい天気、絶好の海日和であった。

夏菊とストレンジャーの寝る部屋に朝日が差し込み、2人は目を覚ました。

「うーん。」

「ふああ〜」

2人は体を起こし、ベットから降り立った。

「おはよう、ストレンジャー君。」

「おはようマスター。」

夏菊はストレンジャーに朝の挨拶をし、着替えを始めた。

ストレンジャーはベットの下に置いた靴を履き、支度をした。

本日はクラスメート達との約束の日。

夏菊は少々嬉しそうに用意をし、荷物を持って下へ降りて行った。

ストレンジャーも同様に後に続いて降りて行った。

「おはよう、母さん。」

「おはよう夏菊。 お弁当出来てるわよ。」

夏菊の母はお弁当を夏菊に差し出した。

「ありがとう、母さん。」

夏菊はお弁当を受け取り、荷物の中へ入れた。

「ストレンジャーさんの分もあるわよ。」

夏菊の母はもう1つのお弁当を、ストレンジャーに差し出した。

「自分の？ あ、ありがとうございます。」

ストレンジャーはお弁当を受け取った。

「さ、2人とも、朝ご飯食べて海を楽しんできてね。」

「いただきまーす。」

夏菊とストレンジャーはお弁当とは別の、朝ご飯を食べ始めた。

その後夏菊は洗顔等の身だしなみを整え、玄関へ。

「じゃあ母さん。 行ってきまーす。」

「行ってきます。」

「行ってらっしゃい2人とも。 楽しんできてね。」

夏菊とストレンジャーはそれぞれの荷物を持ち、外へ出て行った。

夏菊の母は笑顔で2人を見送った。

外は朝方にもかかわらず、暑い陽気だった。

夏菊は自転車に乗り、待ち合わせの駅へ向かって行った。

ストレンジャーは翼を広げ、夏菊の後について行った。

しばらく自転車を扱いで駅に付くと、夏菊は駅周辺の自転車置き場に自転車を止め、待ち合わせの駅前へ。

「よう夏菊、ストレンジャー。 おはよう。」

夏菊が駅前へ行くと、藍樹がすでに来ており、待っていた。

「おはようございます。 藍樹。」

「おはよう藍樹。 今日もいい天気だね。」

「そうだな。 絶好の海日和だな。」

3人は話しをしつつ、他のメンバーを待っていた。
日差しはまだ弱めのため、外で待っていた。

3人が駅前で待っていると、駅のロータリーに一台の大きな白いリムジンが入ってきた。
リムジンはバス等の邪魔にならない所へ止まり、運転手がリムジン内のサロンのドアを開けた。
ドアからは麦藁帽子に白いワンピースを着た美津華が出てきた。

「おはようございますー 四神君、輝時君、ストレンジャー君。」

美津華は夏菊達を見つけて手を振り、3人を呼んだ。

「おはよう蘭さん。」

夏菊達は美津華が乗ってきたリムジンの前へ移動し、美津華に挨拶をした。

「またすごいリムジンだな。 新しいやつか？」

藍樹はリムジンを見つつ言った。

「ええ、今日は大勢の方が乗れる上に、快適に過ごしてもらえる物を用意しました。」
「そんなに今日は大勢だったか？ 確か俺達とストレンジャーを合わせても5人のはず
だが・・・」

藍樹は終了式の時に話していた時の事を思い出しつつ、そう言った。

「それは、四神君が一番よく知ってると思いますよ。」
「ってことは、他にもいるのか？ 実在するオリジナルキャラクターが。」
「うん。 ここでは出せないから、後ほどね。」

夏菊はそういいつつ、運転手の方に手荷物を預けた。
運転手は2人の手荷物を預かり、トランクへ入れた。

「夜龍の奴、遅いな～」

藍樹は腕時計を見つつ、待ち合わせに遅れている恵を待っていた。

「今日も遅刻みたいですね。」

「ま、いつものことだから仕方ないか。」

3人がロータリーで会話をしていると、

「ひゃー！！ また遅刻だよー！！」

猛スピードで駅前に自転車に乗った女性が突っ込んできた。

その女性とはもちろん恵。 約束の時間に遅れるのは当たり前であるため、3人はそこまで驚かなかった。

若干驚いたのは、そのスピード。 時速60kmを出していてもおかしくないスピードだった。 そのため、駅前には一時的な突風が吹いた。

自転車に乗った恵は夏菊が自転車を止めたのと同じ場所の駐輪場へ向かい、自転車を止めに行った。

しばらくその方向を見ていると、自転車を止めてこちらに向かってくる恵が見えた。

「今日も遅刻だな。 夜龍一」

藍樹はこちらに息切れしつつ向かってくる恵に対してからかいつつ言った。

「ごめんなさいー 今日も寝坊しちゃった・・・ 目覚ましをたくさんかけたのになー」

「でもそこまで遅れてないから別にいいよ。」

夏菊は駅前の時計を見つつ言った。

現在の時刻はAM7時10分。 普通に遅刻である。

「じゃあ皆さんそろいましたので、運転手さん。 お願いいたします。」

美津華は恵の手荷物を持ってトランクへ向かった運転手にそう告げた。

「かしこまりました。 お嬢様。」

運転手はそう言うと、夏菊達をリムジン内へ入ったことを確認してドアを閉め、運転席へ。夏菊達は好きな座席へそれぞれ座った。

「では、お願いいたしますわ。」

「はい。」

運転手は美津華の声を合図に、車を発進させた。
リムジンは駅前を離れ、目的地の海へ向かって走って行った。

発進してからしばらくして、美津華は運転席とサロンを繋ぐ場所の仕切りをした。

「いいわよ。 四神君。」

「わかった。」

夏菊は美津華からの声を合図に、持っていたクローバーを出した。

「ちょっと目を瞑ってて。」

夏菊は藍樹達にそう告げ、両手でクローバーを握り締めた。
藍樹達は言われたとおりに目を瞑った。

『召還！』

夏菊は心の中でそう言うと、クローバーから光が出て、中からアルドール、ピスフリー、ジョイが出てきた。

「もういいよ。」

夏菊の声を合図に、藍樹達は目を開けた。

するとそこには夏菊の作り出した、ストレンジャー以外のオリジナルキャラクター達が立っていた。

藍樹達は少々驚きつつ、その場に立つオリジナルキャラクター達と挨拶をした。

アルドール達は挨拶を終えると、それぞれ好きな場所へ座り、会話を始めた。

藍樹達はそれぞれ話しの息があうキャラクター達と隣同士で話しをしていた。

「美津華さんのその服、オシャレでかわいいですね。」

「アルドールさんのその服こそ、かわいいですよ。」

「ありがとうございます。」

美津華はアルドールと一緒にいろいろと話していた。

口調や育ちが似ているためか、話し方に全然違和感が無かった。

「藍樹は普段どんなトレーニングをしてるんだ？」

一方こちらは藍樹とピスフリー、男の子同士の会話だ。

「そうだな、基本的にバーベルとかだけど、ジョギングがほとんどだな。ピスフリーはどうなんだ？」

「俺もジョギングはするけど、ほとんどロッククライミングだな。」

「それでそんなに筋肉が付いてるのか。すごいな。」

「藍樹の方こそ、バランスが良くてカッコいいぜ。」

藍樹達はそれぞれのトレーニング方法や筋肉を見たりして会話をしていた。

性格も合ってるためか、楽しそうだ。

「恵は、普段どういう事をネットで見てるの？」

こちらは恵とジョイ、ネットの会話のようだ。

「そうねー。特に指定とかは無いけど、ほとんどネットサーフィンね。ブログやホームペ

ージ、あと2chね。」

「私も見てるわよブログ。面白そうなサイト無い？」

「うーん。最近はよくMiddle Gardenを見てるわ。」

「いいわねー、私も見ようかな〜」

「普通に検索で釣れるから行きやすいわよ。」

「そうなの？じゃあ帰ったら早速探して見よっと。」

こちらも性格が似ているため、楽しそうだった。

なぜネットなのかは不明だ。

「みんな楽しそう良かった。」

そんな6人の様子を別のシートで夏菊は見ていた。

「性格が本当にピンポイントであってるんだな。性格の案は友人がモデルか？」

夏菊の隣に座るストレンジャーは夏菊を見つつ言った。

「ううん。普通に見た目とあう性格にしてあるんだ。たまたまだよ。」

「これも偶然なのかな。俺達も似てるのか？」

「多分ね。でも何処が似てるのかはわからない。」

「・・・やさしい所、かな。」

ストレンジャーはふと今までの夏菊の言動や様子を思い出しつつ呟いた。

「？なんか言った？」

夏菊はふとストレンジャーが呟いた言葉が聞き取れず聞き返した。

「いや、なんでもないよ。」

「そう。変なの。」

2人はそう言いつつ、苦笑していた。

サロンで話しをする8人は、人間と獣の枠、世界を超えて楽しく過ごしていた。
藍樹達は藍樹達で、アルドール達はアルドール達で。

「はい！ フルハウス！」

その後8人はトランプをする事になり、ポーカーで遊んでいた。
人数が多いため、2人1組で。

「また強い組かよー」

「お前らちった一手加減しろよなー」

藍樹とピスフリーは毒づきつつジョイ達のペアに言った。

「だってトランプが自動的にくるんだもん。」

2人「ねー」

ジョイと恵はピスフリーと藍樹をからかいつつそう言った。
いつもの藍樹と恵の立場が逆転しており、嬉しそうだ。

「自分達はスリーカードだよ。」

藍樹とストレンジャーは手札をテーブルに出しつつ言った。

「俺らはツーペア。」

「ちっ、負けてばっかなだ。」

藍樹とピスフリーは苦虫を噛み潰したような顔をしつつジョイ達のペアに言った。

「アルドールと美津華はなんだった？」

恵はそんな2人を置いて、美津華とアルドールのペアに問いかけた。

「私達もフルハウスだったわ。」

アルドールは持っていたカードを見つつジョイに言った。

「アタシ達はKのスリーカードよ。」

「こっちはAのスリーカードでした。」

「ええ！！」

ジョイは驚きつつ2人の下へ

「本当！？」

「ええ、ほら。」

美津華は持っていた手札をジョイに見せつつ言った。

ジョイが珍しく、トランプゲームで負けたのであった。

「お、ジョイの始めて敗北だな。」

ピスフリーは少々嬉しそうにそう言った。

「本当、珍しいな。」

ストレンジャーも同様にアルドール達の手札を見つつ言った。

「くやしいわ。 アタシが負けるなんて・・・」

ジョイは敗北感を味わいつつ地面に手を付けた。

ちょうどリムジン内のライトがジョイの上から照らされているため、アニメのワンシーンのようだった。

丁度いい場面のため、ピアノのBGMが聞こえそうだ。

「と、とりあえず元気出して・・・ ジョイ。」

「次のゲーム、始めようぜ・・・」

恵とピスフリーはそんなジョイに気を使ったのか、遠慮がちに言った。

「そうね。 次があるからゲームなんじゃない。 始めましょ！」

その言葉に励まされたのか、ジョイは復活し、テーブルの上に置かれたトランプを纏め、シャッフルし始めた。

『相変わらず立ち直り早いな・・・』

『そう言う所も、私と似てるのね・・・』

ピスフリーと恵はそう思いつつ、ジョイを見ていた。

そんな感じで、リムジンで楽しい一時を過ごしていると、

『お嬢様、目的地の海が見えてきましたよ。』

「あら本当？」

美津華は運転手からの車内放送で外を見た。

するとすでに外は海沿いの道路を走っており、海を楽しむ人々やサーフィンをしている人々が見えてきた。

「皆さん、もうすぐ付きますよ。」

「お！ もうすぐだな。」

藍樹は嬉しそうに言った。

「うわあ！ 素敵な海！！」

ジョイも車の窓から見る海の風景を見て、言った。

「楽しみだな！」

「目的地までもう少しよ！」

ピスフリーと恵はそういい、海に到着するのが待ち遠しくなったようだった。

夏菊達も同様に外を見て、到着するのを待っていた。